



Title	〈妥協の人〉の自画像ブッカー・T・ワシントン『奴隸より身を起こして』における順応と抵抗
Author(s)	里内, 克巳
Citation	言語文化研究. 2021, 47, p. 67-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79325
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈妥協の人〉の自画像

—ブッカー・T・ワシントン『奴隸より身を起こして』における順応と抵抗—

里 内 克 巳

Self-Portrait of the Man Who Made Compromises: Conformity and Resistance in Booker T. Washington's *Up from Slavery*

SATOUCHI Katsumi

Booker T. Washington is known as a black leader with an accommodationist stance toward American society that adamantly maintained racial inequality. His thoughts concerning the race question are well expressed in his 1901 autobiography *Up from Slavery*. By staging himself as the embodiment of the self-help ideology that pervaded the social mainstream, Washington imposes the same idea upon disadvantaged ex-slaves, while exonerating whites from the responsibility of supporting them. Still, Washington's objection to the status quo is perceptible in seemingly peripheral episodes, such as those dealing with his travel overseas. Rather than simply considering Washington to be ineligible as a leader, this paper proposes a more nuanced understanding of him as a person who struggled in vain to bridge the ever-widening racial divide.

キーワード：ブッカー・T・ワシントン，自伝研究，アフリカ系アメリカ文学

1. 話す不安，書く不安

1895年、アラバマ州の黒人学校タスギー・インスティテュート (Tuskegee Normal and Industrial Institute) の校長であったブッカー・T・ワシントン (Booker Taliaferro Washington) は、アトランタで開かれる博覧会の初日で黒人代表としてスピーチをするよう依頼された。この博覧会は、南北戦争後の南部が順調に発展してきたことを対外的に印象付けるため企画されたのだが、主催者たちがワシントンに白羽の矢を立てたのは、彼が黒人教育の献身的な実践者であるとともに、人種間の融和を説くためにたびたび行なってきた演説が人気を博してきたからだった。この依頼を受けて同年9月18日に行なわれたワシントンの演説は、はたして大きな反響を呼び、アメリカ史に記憶されるものになった。合衆国における人種間関係は、「分かれた手の指のように互いに分離した」“as separate as the fingers” (*Up* 100) ものであるべきこと。黒人は額

に汗して労働することの大切さを忘れず、地に足のついた生活をするべきこと。演説におけるそのようなワシントンのメッセージは、人種問題に神経をとがらせていた白人聴衆に安心感を与えるものであった。

白人に対しては過去の奴隸制の責任を免責し、黒人に対してはその自由を求める動きに慎重にブレーキをかけることを眼目とするこのスピーチにおいて、ワシントンが何よりも強調したのは、黒人の自助努力である。大海を何日も漂流した船が渴きに苦しみ、ようやく現れた他の船に対して飲み水をくれるようにと必死で信号を送る。だが呼びかけられた船は、「今いるところでバケツを下ろせ」“Cast down your bucket where you are”(99-100)という応答を繰り返すのみ。ようやく漂流船がその返事の通りにその場でバケツを投下し、また引き上げると、バケツはアマゾン河口から流れてきた真水で満たされていた——。演説中で披露されるこの印象的なエピソードは、白人に多くのことを求めるのではなく、現状での自助努力を黒人に促すためのたとえ話として、とりわけ知られている。

この演説はメディアに大きく取り上げられて賞賛を受け、これをきっかけに、当時の大統領であったグローバー・クリーブランド (Grover Cleveland)との親交も始まった。白人受けが良いがために合衆国の中核にも働きかけることのできる、強力な黒人のスポーツマンとしてのワシントンのキャリアが、ここから本格的に始まることになる。しかしながらやがて、黒人コミュニティの内部からは、彼が白人に対して追従的であるとか、黒人の権利を十分に主張していない、といった批判の声があがるようになった。この演説が「アトランタの妥協」(Atlanta Compromise)という否定的な名称で知られているのは、そのような理由からである。現在でもワシントンは、同時代のよりラディカルな黒人指導者 W. E. B. デュボイス (W. E. B. Du Bois)と対比的に扱われ、白人への迎合者、ないしは黒人の裏切り者というイメージがまとわりついている。その好ましくない評判は、このアトランタ演説の時期からすでにあったことになる¹⁾。

しかし、1901年に出版された自伝『奴隸より身を起こして』*Up from Slavery*によれば、この演説をした際のワシントンの心境は、決して単純なものではなかった。演説を受諾した際の複雑な心境が、この著作では以下のように述べられている。

I was determined to say nothing that I did not feel from the bottom of my heart to be true and right. … I was also painfully conscious of the fact that, while I must be true to my own race in my utterances, I had in my power to make such an ill-timed address as would result in

1) デュボイスのワシントン批判の文章として最も有名なものは、*The Souls of Black Folk* の第3章 “Of Mr. Booker T. Washington and Others” で、この著作が出版された時期から、両者の仲は急速に冷え込んでいく。ただし、この章の原型となった論考 “The Evolution of Negro Leadership” が、*Up from Slavery* 出版直後の1901年7月に発表された頃には、二人の仲はまだ険悪ではなく、1902年にはタスキギーでの教職のポジションを与えようとワシントンがデュボイスに面接を行なうなど、両者の関係はある程度保たれていた。ワシントンとデュボイスの思想の類似点と隔たりについては、Kevern Varney, *The Art of the Possible* の第6章 “The Realist and the Dreamer?: Booker T. Washington and W. E. B. Du Bois” (79-93) を参照。

preventing any similar invitation being extended to a black man again for years to come. I was equally determined to be true to the North, as well as to the best element to the white South, in what I had to say. (96)

ここでは、本心を隠さずありのままに語りたい、という気持ちがある一方、言動に注意しなければ自分の後に続く黒人同胞が発言する機会を奪ってしまう、という警戒心も彼にはあったことが示されている。それに加えてワシントンは、演説の直後の自分は、本当に言いたいことが言えなかつたような気になった、とも書いている。

People often ask me if I feel nervous before speaking, or else they suggest that, since I speak so often, they suppose that I get used to it. In answer to this question I have to say that I always suffer intensely from nervousness before speaking. … I not only feel nervous before speaking, but after I have finished I usually feel a sense of regret, because it seems to me as if I had left out of my address the main thing and the best thing that I had meant to say. (110)

このように、アトランタでの演説を振り返る彼の言葉は、演説の前であっても後であっても、不安・逡巡・後悔といった負の感情に特徴付けられている。この気弱な心情描写を、当時に感じた自らの思いの吐露として受け取るならば、演説で展開された迎合的な政治的主張は、個人としてのワシントンの意見とは必ずしも同一のものではなく、北部と南部の白人聴衆を意識して、慎重にコントロールされたものだった可能性がある。

話し手の本音がどのようなものであれ、様々な立場にある聴衆——とりわけアメリカ主流社会に属する人々——に好意的に受け入れられる、口当たりの良い演説が、最初から彼には求められていた。そのことは演説に限るものではない。アトランタ演説は、ワシントンの名声を不動のものにした『奴隸より身を起こして』の第14章「アトランタ博での演説」“The Atlanta Exposition Address”に全文が収録され、この自伝のクライマックスを形成している。ここに描かれた、演説に臨む前後のワシントンの心情描写は、それが組み込まれている自伝テキストを書くにあたっての彼の心境としても読める。『奴隸より身を起こして』は出版に先立ち、1900年の11月から翌年の2月まで、週刊新聞『アウトルック』The Outlookに連載された。ニューヨークで発行されていたこの定期刊行物の主たる読者層は東部の白人中産階級の人々だった。家庭で皆が読むような新聞であり、ワシントンとしてはそうした事情を考慮し、読み手を極度に刺激するような内容を避けるよう、気をつけなければならなかったのである。そのような状況の類似を考慮すると、『奴隸より身を起こして』で書き込まれた、演説に際して感じた彼の不安や逡巡は、自伝の書き手としての気持ちの揺れを表明するものとして捉え直すことができる。

そこで本稿では、白人側からの一方的な期待という制約がかかるなかで書かれた『奴隸より

身を起こして』を取り上げ、そこに盛られたレトリックやロジックを仔細に観察することで、ワシントンが描いた自画像の揺れ具合を検分してみたい。まず次節では、自伝で提示されるライフ・ストーリーの保守性と、展開される政治的主張の危うさを再確認する。そのうえで次に、諱晦的な書きぶりのなかに合衆国における黒人の処遇に対する無念を滲ませた箇所や、黒人にとって不利な状況に抗う姿勢をひそやかながらも示すくだりへと、目配りしていきたい。一般に理解されている以上に複雑な陰影に富んだこの自伝を解読することによって、ワシントンという人物が抱えた〈脆さと勁さ〉の在り様をあらためて考えてみるのが、本稿の目的である。

2. 〈学校〉の黒人たち

世紀転換期における黒人指導者の間での論争の、主たる争点の一つは、奴隸制の輻から逃れた民衆の教育という領域にあった。ワシントンが黒人のための職業教育を推進したことに対抗して、デュボイスが『黒人のたましい』*The Souls of Black Folk* で教養教育の大切さを力説したことは、よく知られている。デュボイスが鋭い舌鋒を向けたものの、実学や職業教育を重視するワシントンの信念が筋金入りであることには疑いの余地がない。額に汗して労働することの尊さを生徒に自覚させ、世の中での自活を可能にする職を身につけさせることを目指すタスキギー・インスティテュートは、奴隸の身分から出発して苦勞を重ね、校長にまでなったワシントンの持論を実践する場であった。『奴隸より身を起こして』には、もちろん教育以外のトピックをめぐっての彼の考えが盛られているが、その際にも教育者としての経験が、文章に様々な形で影を落としていく。ここでは著作におけるレトリカルな側面に焦点を合わせ、〈学校〉というイメージがどのように使われているかを主たる手掛かりとして、奴隸制や南北戦争後の人種関係といったデリケートな政治的トピックについて、この人物がどのような考え方を持っていたのかを確認してみたい。

「学校」という言葉は、ワシントンが生まれ落ちた環境である南部の奴隸制を振り返る第1章「奴隸たちのなかの奴隸」“A Slave among Slaves”で早々と、しかも繰り返して使われている。

Then, when we rid ourselves of prejudice, or racial feeling, and look facts in the face, we must acknowledge that, notwithstanding the cruelty and moral wrong of slavery, the ten million Negroes inhabiting this country, who themselves or whose ancestors went through the school of American slavery, are in the stronger and more hopeful condition, materially, intellectually, morally, and religiously, than is true of an equal number of black people in any other portion of the globe. This is so to such an extent that Negroes in this country, who themselves or whose forefathers went through the school of slavery, are constantly returning to Africa as missionaries to enlighten those who remained in the fatherland. (13-14 下線は引用者による)

下線を引いて示したように、ここでは奴隸制と学校制度とを等号で結ぶ、現在の視点から見れば驚くべき表現が繰り返されている。暴力を加えて抑圧する非人間的な制度として批判するのではなく、ここでは人間を鍛成する場としての肯定的な役割が奴隸制にはあったのだ、という考えが示されている。この制度を部分的にせよ正当化しようとする発想が、ここには見られる。

奴隸制が〈学校〉であるならば、白人と黒人の関係は、教師と生徒の間の上下関係にあてはめられる。そのヴァリエーションである親と子、保護者と被保護者といった関係を人種関係にあてはめた例が、第1章の終わり近くには見出せる。奴隸解放の報せに接しての白人たちと黒人たち、それぞれの気持ちを描いた以下のようなくだりである。

All of our master's family were either standing or seated on the veranda of the house, where they could see what was to take place and hear what was said. There was a deep feeling of deep interest, or perhaps sadness, on their faces, but not bitterness. As I now recall the impression they make upon me, they did not at the moment seem to be sad because of the loss of property, but rather because of parting with those whom they had reared and who were in many ways very close to them. (15 下線は引用者による)

The great responsibility of being free, of having charge of themselves, of having to think and plan for themselves and their children, seemed to take possession of them. It was very much like suddenly turning a youth of ten or twelve years out into the world to provide for himself. In a few hours the great questions with which the Anglo-Saxon race had been grappling for centuries had been thrown on these people to be solved. (15-16 下線は引用者による)

最初の引用では、下線で示したように「育てる」(rear) という語を使うことによって、同じ農園に暮らしてきた白人の一家と黒人奴隸たちの間に結ばれる関係が、親子の絆になぞらえられている。それに呼応するかのように2番目の引用では、不意に解放を告げられて戸惑いを隠せない黒人奴隸たちが、用意も整わないうちに世の中に放り出される10歳から12歳くらいの少年少女に喩えられている。こうした比喩表現には、白人と黒人の対立図式を避けようとするワシントンの態度が反映されている。この自伝で彼が採用したスタンスは、奴隸制の辛さや問題性を経済的な貧しさのみにほぼ限定することであり、また、その体制を支持したはずの白人側の責任を不問に付し、逆に恩恵者として示すことでもある。奴隸制は残酷で非人間的な制度というよりも、むしろ肯定的な意味付けが与えられている。

ワシントンにとって、奴隸としての出自が一種の恵みとして捉えうる別の理由として、刻苦勉励による社会的上昇の程度がそれによって大幅に増す、という点が挙げられる。ワシントン

は自伝の第2章で、真の人間の成功は乗り越える障害の多さで決まる、と述べている（19）。主流の白人よりも、奴隸という、人間としてはゼロ以下の地点から出発した黒人こそ、合衆国で重んじられている〈セルフメイド・マン〉のモデルにふさわしいのだと主張するわけだ。はたして、奴隸の子として幼少年時代を過ごし、南北戦争後に苦学して社会的上昇を果たしていくブッカー・ワシントンのライフ・ストーリーは、19世紀の白人主流社会で人気を博した〈艦橋から金持ちへ〉という立身出世の物語のパターンを、そっくりなぞるものになっている。ワシントンの浩瀚な評伝を書いたルイス・R・ハーラン（Louis R. Harlan）が、『奴隸より身を起こして』を評して、「黒人版のホレーショ・アルジャーの物語」と述べているのは、誠に至当なことだと言えるだろう（253）。

ワシントンは自らのライフ・ストーリーを書く際、それ以前に書かれた主流のアメリカ人の伝記・偉人伝を念頭に置いていたと思われる。例えば、読書の好みを語るくだりでワシントンは、小説より伝記のジャンルを好むと述べ、とりわけ、顕著な社会的上昇で知られるリンカーンについて書かれた本や記事への関心を表明している（Up 120）。こうしたくだりは、有名人の伝記と自分の著作との類似を読み手に印象付けるために書かれている節がある。ワシントンが師として仰いだのは、彼が学んだハンプトン・インスティテュート（Hampton Normal and Agricultural Institute）の校長サミュエル・アームストロング（Samuel Armstrong）だが、この人物だけでなくリンカーンなども含めた白人の著名人物たちをロールモデルにしていることを、ワシントンは強調している²⁾。『奴隸より身を起こして』において顕著なこの書き手の姿勢は、最初の自伝『我が人生と仕事の物語』*The Story of My Life and Work*（1900年）にも、後年の『我が教育の進展』*My Larger Education*（1911年）にも見られない、この自伝に特有のものである。

『奴隸より身を起こして』に特徴的な、アメリカ白人男性の立身出世譚に寄り添うような物語の運びには、白人読者層におもねり迎合しようとする書き手の態度が伺える。実際、この自伝では、南北戦争後の南部黒人の教育や社会的上昇という課題について、ひたすら黒人側の自助努力を強調し、白人側の責任や関与という問題を回避するワシントンの姿勢が前面に出されている。先に見た奴隸制という〈学校〉をめぐる記述がその最たるものであるが、この自伝の主要部とも言える、タスキギーに〈学校〉を設立し発展させた過程を辿る諸章においても、ワシントンの保守的な政治観が顕著に表れている。その例を以下に見ていただきたい。

第10章「藁なしでレンガを作るより困難な仕事」“A Harder Task than Making Bricks without Straw”では、タスキギーに学校を設立するため粉骨碎身するワシントンの姿が描かれている。必要な資金を持たない彼は、周囲の反対を押し切って生徒たちにはたらきかけ、自分たちでゼ

2) 本文には書き込まれていないものの、自伝を書く際にワシントンが範にしたであろう有名人物として、建国の父の一人であり〈セルフメイド・マン〉の典型であるBenjamin Franklinを挙げることができる。『奴隸より身を起こして』出版直後の1901年4月4日に『ネイショナル』誌に掲載された書評においては、ワシントンがリッチモンドに無一文で到着する第3章のくだり（Up 26-27）が、フランクリンの自伝におけるフィラデルフィア到着の記述と類似しているという指摘がある（“Review” 162）。同様に、自伝研究の第一人者であるSidonie Smithも、『奴隸より身を起こして』とフランクリン自伝との類似を指摘している（221-22）。

口から校舎の建物をつくるべくレンガの製造を試みる。試行錯誤の末にようやく出来上がったレンガを少しづつ積み上げるなど、ワシントンとその同僚や生徒たちは力を合わせて働き、自前の校舎を完成させる。ここで重要性を持つのは、〈緩やかで自然な成長〉という発想である。生徒たちは最初から自前の校舎をあてがわれて安逸な環境のなかで学ぶより、校舎の建て方から学んでいくことから始めた方が良い、なぜなら後者の方がより自然な学びのプロセスに沿うからだ—そのようにワシントンが主張するくだりで、この表現はまず使われる。

I further told those who doubted the wisdom of this plan, that the majority of our students came to us in poverty, from the cabins of the cotton, sugar, and rice plantations of the South, and that while I knew it would please the students very much to place them at once in finely constructed buildings, I felt that it would be following out a more natural process of development to teach them how to construct their own buildings. Mistakes I knew would be made, but these mistakes would teach us valuable lessons for the future. (69 下線は引用者による)

ここで下線を引いた“a more natural process of development”という表現は、次の引用に見るようすに、章の最後においても類似の表現となって反復されている。

When our students return to Tuskegee now, as they often do, and go into our large, beautiful, well-ventilated, and well-lighted dining room, and see tempting, well-cooked food—largely grown by the students themselves—and see tables, neat tablecloths and napkins, and vases of flowers upon the tables, and hear singing birds, and note that each meal is served exactly upon the minute, with no disorder, and with almost no complaint coming from the hundreds that now fill our dining room, they, too, often say to me that they are glad that we started as we did, and built ourselves up year by year, by a slow and natural process of growth. (75 下線は引用者による)

この“a slow and natural process of growth”という表現は、章の締めくくりとなることによって読み手に強い印象を与えるばかりか、直前の“built ourselves up”と繋がることで、校舎とそこに学ぶ者との境界を不分明にし、前者の建築が後者の自己形成と等価なものであることを示唆する効果もたらしている。ゼロから始める校舎づくりは、黒人生徒の教育の一環として提示されているだけではなく、校舎をつくるプロセス自体が、黒人生徒のあるべき人格形成の比喩ともなっているのである。

より厳密に言うならば、“we started as we did, and built ourselves up year by year”という文章の代名詞“we”は、生徒だけでなく教師をも含んでいる。そこから更に考えを展開させていく

と、ここで語られる校舎づくりのプロセスは、ただ学校教育のレベルに留まらず、〈私たち〉、すなわちかつて奴隸であった黒人すべてにとっての、アメリカ社会への参入のあるべき道筋を語るメタファーとして機能している。この自伝においてワシントンは、解放後の黒人たちが一足飛びに社会上昇する望みを持つ傾向があるのを、事あるごとに諫めている。土台から着実に積み上げて建てられる校舎は、彼がかくあるべしと考えるところの、黒人たちのゼロ地点からの社会上昇のプロセスを、比喩的に表現したものでもある。このことは、第10章で繰り返される〈緩やかな成長〉というイメージが、自伝の山場であるアトランタ博での演説を描いた第14章の末尾において、“natural, slow growth”という表現となって再提示されることで、より明瞭になる。

I believe it is the duty of the Negro—as the greater part of the race is already doing—to deport himself modestly in regard to political claims, depending upon the slow but sure influences that proceed from the possession of property, intelligence, and high character for the full recognition of his political rights. I think that the according of the full exercise of political rights is going to be a matter of natural, slow growth, not an over-night, gourd-vine affair. (107
下線は引用者による)

この引用でワシントンは、黒人が政治的な権利を十全に行使するのはまだ無理があり時期尚早だ、という見方を披露している。黒人が自らに与えられた権利を賢明に使う際には、より豊かで、知性にも人格にも優れた白人たちからのアドバイスに謙虚に従うべきだ、というのである。黒人はしばらくの間、経済的にも道徳的にも地道な努力を自力で積み重ねていくしかないのであって、いつかはその果てに白人と同じように政治的な権利を十全に発揮できるようになるだろう、と彼は述べている。

以上のように、ゼロからの学校運営を主軸とするブッカー・ワシントンの私的な物語は、黒人のアメリカ社会への参入をめぐる彼の公的な考え方と密着した関係にある。このような形で明かされるワシントンの政治的なヴィジョンが、当時の合衆国の白人社会において大勢を占めていた、政治的・社会的な権利を黒人と平等に分かち合うことにためらいを持つ人々や、自分たちと黒人との関係を、奴隸制時代と同様に、保護する者と保護される者の関係に留めおきたいと考える人々の好みにかなったものであったことは、言うまでもないだろう。

3. ひそやかな抵抗

体制順応的な政治観をレトリックにおいてもストーリーにおいても示すこの自伝で、白人や合衆国政府に対して対抗的な構えを示すことを、ワシントンは極端に避けようとする。しかし

丁寧に読めば、彼が政府のやり方に対して批判を試みる箇所が、ないわけではない。それらは一見して周縁的な、脱線とも見える章に、目立たないように配置されているのである。本節からは、そうした箇所に目を向けてみることにしたい。

例えば、「再建期」“The Reconstruction Period”と題された第5章を取り上げてみよう。これはワシントンが自らのライフ・ストーリーという本筋から離れて、アメリカ社会の過去40年ばかりの歩みを振り返る章である。ここでワシントンは、教育を受けた経験が圧倒的に足りないにもかかわらず、解放直後の黒人たちの間で地位の高い公職に就きたがる風潮があったことを批判している。これは前節でも取り上げた、黒人の高望みをたしなめるという『奴隸より身を起こして』に顕著な主張の一例だ。しかし、“Even as a youth, and later in manhood, I had the feeling that it was cruelly wrong in the central government, at the beginning of our freedom, to fail to make some provision for the general education of our people in addition to what the state might do, so that the people would be the better prepared for the duties of citizenship”(42)という記述では、合衆国政府が黒人民衆に適切な教育を与えることをしてこなかったのではないか、という思いを自分はずっと抱いてきたと述べている。ここでのワシントンは、黒人に対する責任を政府が負っていることを、控えめながらきちんと主張している。続けて彼は、しかるべき教育や財産を持ち合わせた者だけにアメリカの公民権を与えるようにするべきだった、とも述べている——“Still, as I look back now over the entire period of our freedom, I cannot help feeling that it would have been wiser if some plan could have been put into operation which would have made the possession of a certain amount of education, property, or both, a test for the exercise of the franchise, and a way provided by which this test should be made to apply honestly and squarely to both the white and black races”(42)。これは黒人の公民権獲得の望みに一見すると水を差すような意見ではある。しかし、同じ物差しが黒人だけでなく白人にも当てはめられるべきだとする主張で結ばれることで、最終的に批判の矛先は白人の方にも向けられていることを見逃すべきではない。

再建期の時代から現在へと書き手の思いが移ってからも、この主張は繰り返されている。

More and more I am convinced that the final solution of the political end of our race problem will be for each state that finds it necessary to change the law bearing upon the franchise to make the law apply with absolute honesty, and without opportunity for double dealing or evasion, to both races alike. Any other course my daily observation in the South convinces me, will be unjust to the Negro, unjust to the white man, and unfair to the rest of the states in the Union, and will be, like slavery, a sin that at some time we shall have to pay for. (43 下線は引用者による)

人種問題の最終的な解決法は、法律を黒人にも白人にも等しく適用させることであって、そうすることが黒人だけでなく白人も含めた合衆国の益となる——それがこの引用部の主旨である。下線で示したように、ここでワシントンは“like slavery”という喩えを挿入して、法律が正当に適用されない限り、黒人はいまだに奴隸制と変わらぬ境遇にいることになる、と示唆している。ここでの「奴隸制」「slavery」は、前節で指摘したような人間鍊成のための〈学校〉としての捉え方とはまったく異なる否定的な意味合いを持ち、過去から連綿と続く現在における黒人たちの苦難を強調することに寄与している。

続く第6章の「黒い人種と赤い人種」「Black Race and Red Race」においても、書き手ワシントンの異議申し立てを認めることができる。総じて明快に語られたこの自伝の中でも、この第6章は書き手のメッセージを簡単に捉えることがしにくい章なので、立ち入って検討してみたい。ライフ・ストーリーという観点から見るならば、これは1879年、恩師のアームストロングに請われて、ワシントンが母校ハンプトン・インスティテュートに戻ったときの体験を振り返る章である。アメリカ人へと同化させるのが不可能と考えられてきたインディアン（先住民）の若者たちを教育するため、ワシントンは彼らと寝食を共にしつつ親身に指導を行なう。愛情と敬意をもって接し、信頼を勝ち得ることによって、最終的に彼はこの生徒たちを〈文明化〉することができた。そしてこの成功には、インディアンの生徒に好意的に接してあげた黒人生徒たちの活躍も一役買っている。

こうして章半ばまで黒人とインディアンの親和性が強調されていくわけだが、話は次のような文章を機として、次第にライフ・ストーリーの本筋から逸れていく。

I have often wondered if there was a white institution in this country whose students would have welcomed the incoming of more than a hundred companions of another race in the cordial way that these black students at Hampton welcomed the red ones. How often I have wanted to say to white students that they lift the themselves up in proportion as they help lift others, and the more unfortunate the race, and the lower in the scale of civilization, the more does one raise one's self by giving the assistance. (48)

ここでワシントンは、ハンプトンでは黒人生徒がインディアンの生徒に親身に接してあげたけれども、この国の白人が運営する学校では、他の人種の生徒に対して白人生徒が同様に温かい気持ちで接することがあるだろうか、と問いかけている。そして、不運な境遇にある他の人種の生徒に手を差し伸べることによって、白人の生徒もまた自らの値打ちを高めることができるように、と付け加えてもいる。もちろんここでの〈他の人種〉というのは黒人のことを指す。こうして書き手ワシントンは、当初の話題であった黒人とインディアンとの関係を、白人と有色人種（特に黒人）との関係のあるべき姿というトピックへと巧みに切り替えるのである。

この引用で触れられている異人種間関係は、表面上は学校という制度の枠内での話であるが、ここでの〈学校〉は、アメリカ社会全体の比喩として捉えることもできる。学校をより大きな社会集団と重ねようとする発想がこの自伝にあることは、前節でも指摘したわけだが、ここでのメッセージの方向性は、先ほどとはむしろ逆になっていることに留意すべきである。そのことは、一世代前の黒人指導者フレデリック・ダグラス（Frederick Douglass）と生前に話を交わした際に聞いたエピソードが次に持ち出されることで、より明瞭になる。

This reminds me of a conversation which I once had with the Hon. Frederick Douglass. At one time Mr. Douglass was travelling in the state of Pennsylvania, and was forced, on account of his color, to ride in the baggage-car, in spite of the fact that he had paid the same price for his passage that the other passengers had paid. When some of the white passengers went into the baggage-car to console Mr. Douglass, and one of them said to him: "I am sorry, Mr. Douglass, that you have been degraded in this manner," Mr. Douglass straightened himself up on the box which he was sitting, and replied: "They cannot degrade Frederick Douglass. The soul that is within me no man can degrade. I am not the one that is being degraded on account of this treatment, but those who are inflicting it upon me." (48-49)

ダグラスは鉄道で旅行した際、黒人であるがために客車ではなく荷物を収納するための車両に移るよう命じられた。彼を慰めるために何人かの旅客が立ち寄り、「ダグラスさん、こんなやり方で辱められる（degraded）ことになって、お気の毒です」と声をかける。しかしダグラスは毅然として、本当の意味で“degrade”されるのは、むしろこのような恥すべきやり方を行なう側なのです、と返すのである。この挿話の舞台となっている鉄道は、学校と同様に、アメリカ社会の縮図ないしは比喩として機能している。黒人に対して害を及ぼそうとする白人は、結局のところ自分自身に害を及ぼすことになるのだ、という主張はこの自伝で何度も繰り返されるが、こうしたワシントンお得意の再帰的レトリックがダグラス譲りのものであることが、ここで明かされることも重要である。その意味でこの挿話は、時に体制を激しい言葉で糾弾した黒人指導者ダグラスの後を継ぐ人物としてのワシントンの姿が垣間見られる箇所になつてもいる³⁾。

更に興味深いことに、ダグラスをめぐる上述のエピソードは、帽子を取って挨拶をしてきた黒人に同様のやり方で挨拶し返したという、ジョージ・ワシントンをめぐる逸話とペアにされ、ブッカー・ワシントン自身が合衆国首都で受けた差別体験の記述もそこに添えられる（49-

3) ワシントンがダグラスの演説を初めて聴いたのは、1888年または89年のことである。その後、ダグラスは1892年にワシントンの招きに応じて、卒業式で演説を行なうためにタスキギーを訪問している。ダグラスが列車で体験した出来事を語るこの挿話についてVerneyは、車掌と対決せず名誉ある妥協を選んだダグラスの姿を書き込むことで、書き手のワシントンはダグラスと自分との政治的な立場の近さをそれとなく強調したのではないかと示唆している（23）。その見解に従うならば、南北戦争後の社会的変化のなかで態度を保守化させていったダグラスの姿が、ここには反映されているとも考えられる。

50)。そのような、人種を横断したエピソードの連鎖を作ることによって、〈他人種に対する敬意と寛容を〉という書き手のメッセージは、南部の黒人学校というローカルな場から、次第にナショナルな次元へと引き上げられ、合衆国に生きる者なら誰しも実践しなければならない〈理念〉としての位置付けが与えられていく。

他にも第6章の後半での記述には、黒人専用の車両に白人と変わらない肌の色をした混血の男性がいるのを目にして車掌が当惑する挿話（49）や、モロッコ人の旅行者がアメリカ黒人と間違えられてリンチされかかる挿話（50）などが盛り込まれている。肌の色が明るければ必ず〈白人〉だというわけではないし、肌の色が昏ければ必ず〈黒人〉だというわけでもない—そうしたアメリカ国内での慣習に内在する矛盾が、ここではあぶり出されている。言い換れば、〈人種〉という概念が恣意的な約束事に過ぎないことが暴露されると同時に、そのような頼りない枠組みを使って、生きた人間を捉え判断することへの根本的な疑念が表明されることになる。これは社会にレイシズムが確固として根を下ろしていた当時の状況においては、きわめて大胆な主張であると言える。

この章での叙述の流れは未整理で、とりとめのない脱線の連続であるという第一印象を当時の読み手は抱いたはずである。しかし、それはいわば白人読者を攪乱する目くらましなのだと考えられるのではないだろうか。次々に提示される挿話と挿話、ないしは段落と段落の間の繋がりをつぶさに検討していくと、当時としてはかなり大胆で思い切った主張を展開して、白人中心のアメリカ社会の在り方に対して何とか異議を唱えようとするワシントンの密やかな企図が見えてくる。「黒い人種と赤い人種」という、マイノリティ同士の関係を前面に出したタイトルの背後に、彼にとってより切実な、そして扱うにはより神経を使う人種関係についての主張が巧みに隠されているのである。

4. ブッカー・T・ワシントンの〈トランス・アトランティック〉

引き続いて、白人社会への書き手の抵抗が見られる興味深い章として、「ヨーロッパ」「Europe」と題された第16章を検討してみたい。これもやはり、一見すると周縁的な章である。1899年の春、ワシントンがボストンで開かれた会合に出席した折、彼が相当に疲れた様子をしていることを憂慮した知人たちが、海外で休暇が取れるよう寄付金を募ることにした。そのおかげでワシントンとその妻マーガレットは、5月にヨーロッパへと渡航できる運びになった。ベルギー、オランダ、フランス、そしてイギリスをめぐる数ヶ月の海外体験を振り返るのが、この「ヨーロッパ」の章である。これまで見てきたようなワシントンの保守性とラディカルさが同時に露わになる興味深い章なので、集中的に検討してみることにしよう。

まずパリ滞在についてのくだりで興味を惹かれるのは、ヘンリー・O・タナー（Henry Ossawa Tanner）というアメリカ黒人が、画家としてたいへん評価されていることを知り、ワシントン

がとても強い印象を受けたという記述である。

While in Paris we saw a good deal of the now rather famous American Negro painter, Mr. Henry O. Tanner, whom we had formerly known in America. It was very satisfactory to find how well known Mr. Tanner was in the field of art, and to note the high standing which all classes accorded to him. When we told some Americans that we were going to the Luxembourg Palace to see a painting by an American Negro, it was hard to convince them that a Negro had been thus honoured. … My acquaintance with Mr. Tanner reenforced in my mind the truth which I am constantly trying to impress upon our students at Tuskegee—and on our people throughout the country, as far as I can reach them with my voice—that any man, regardless of colour, will be recognized and rewarded just in proportion as he learns to do something well—learns to do it better than some one else—however humble the thing may be. (127 下線は引用者による)

タナーは1859年生まれの黒人画家で、フィラデルフィアでリアリズム絵画の巨匠トマス・エイキンズ (Thomas Eakins) の教えを受け、1891年からはフランスを活動の場とした人物である。タナーはワシントンと、このパリでの出会い以前にも面識があり、後年には彼の肖像画を描いている (1917年)。成すべき仕事に磨きをかけ、世の中の役に立つようにすれば、その人の人種にかかわりなく認められる—自伝のなかで何度も繰り返すそんな持論を体现する人物として、ワシントンはタナーを賞賛している。しかし一方、タナーのように芸術に関連する仕事を黒人がするとき、アメリカでこれほど評価されるか、という問い合わせが当然ながら出てくるわけだが、ワシントンはその点にはほとんど触れていない。自国の批判をあからさまに行なうことで白人読者の心証を害することを慮り、回避していることは想像に難くない。肉体労働以外の領域でも黒人が認められるフランスという国の度量の広さと、それがかなわないアメリカ社会の閉鎖性。その点がテクストに浮上してくるぎりぎり手前で、書き手は筆を止めてしまうのである。

イギリス滞在に関する記述も興味をそそられる。ロンドンでワシントンは、アフリカ探検家として知られるヘンリー・モートン・スタンレー (Henry Morton Stanley) に会っている。ワシントンは、アフリカとアメリカ黒人との関係についてスタンレーと話をしたというのだが、アメリカ黒人をアフリカに移民させて社会的な向上をはかるという、当時検討されていた考えはもう見込みがないことを確信した、と述べている—"In the House of Commons, which we visited several times, we met Sir Henry M. Stanley. I talked with him about Africa and its relation to the American Negro, and after my interview with him I became more convinced than ever that there was no hope of the American Negro's improving his condition by emigrating to Africa" (130)。ワシ

ントンがこのような考え方を持った理由については詳らかにされていないが、『奴隸より身を起こして』に先立つ最初の自伝『我が人生と仕事の物語』ではもっと率直に述べている。ロンドンに滞在している間に自分は、アフリカがヨーロッパの列強によって幾つもの植民地に分割され、そこに住むアフリカ人たちは、アメリカ南部の黒人たちと同じくらい酷い扱いを受けていることが分かった、というのである (*Autobiographical Writings* 149)。しかし、白人オーディエンスを相手にして、合衆国を含めた列強の帝国主義を批判したり、自国において黒人に蛮行が加えられていると示唆したりすることは、受けが悪いはずなので、今回は避けなければならない。そんな判断が明らかに働いて、『奴隸より身を起こして』でのこのあたりのワシントンの記述は控えめなものになっている。

実はワシントンがヨーロッパに滞在している時期に、アメリカ南部では黒人をターゲットにしたリンチが急増していた。それを憂えた彼は、黒人へのリンチをやめるよう呼びかける記事をアメリカ本国に向けて送っている。その記事の全文が、『我が人生と仕事の物語』には長々と引用されている (149-54)。南部の黒人が主たる読者層だったこの最初の自伝でヨーロッパ渡航を扱っているのは第18章であるが、章の大半はこのような記事で占められ、肝心のヨーロッパで体験したことの記述がかすんしてしまうくらいだ。その長い記事の引用は、白人を主たる読者層とする自伝『奴隸より身を起こして』では当然ながら削除された。ヨーロッパ渡航を扱う章だけでなく、この著作の全編にわたって、ワシントンは黒人リンチの扱いにとても神経を使い、言及を最小限に留めるようにしている。しかしその埋め合わせをするかのように、書き手はこの渡航でかかわりを持った人の名前を慎重に選択し、明記することを通して、自らのヨーロッパ滞在の政治的な性質がそれとなく伝わるようにしている。そのことに関して以下に説明を加えてみたい。

『奴隸より身を起こして』においてワシントンは、このヨーロッパ滞在で多くの著名人に出会ったことを読者に明かしている。その多くはアメリカ人で、ヨーロッパに行っても彼と母国との絆がすっぱり切れたわけではないことが了解される。そのなかにはマーク・トウェイン (Mark Twain) のような文学者の名前も見られるが (*Up* 129)⁴⁾、ウィリアム・ロイド・ギャリソン (William Lloyd Garrison) やフレデリック・ダグラスといった旧世代の奴隸制廃止論者たちと親交のあった人たちと知り合いになった、という記述もある (129)。女性解放運動に身を捧げる人々との出会いもあった。パリではエリザベス・ケイディ・スタントン (Elizabeth Cady Stanton) の息子に会っているし (126)、ロンドンではスーザン・B・アンソニー (Susan B. Anthony) に会ってもいる (129)。

そもそもこの渡航を可能にした寄付金集めの呼びかけ人として、この自伝ではフランシス・

4) ワシントンがトウェインに初めて会ったのは、1899年7月に駐英アメリカ大使Joseph H. Choateが主催したアメリカ独立記念の祝賀会においてだった。ワシントン、トウェイン、そしてチョートはその後、タスキギー・インスティテュートを経済的に支援するため、カーネギー・ホールで開かれた講演会で同席している。トウェインの1906年1月23日付の『自伝』口述原稿を参照 (302-09)。

J・ギャリソン (Francis J. Garrison) なる人物の名前が説明抜きに挙げられている (123)。実は彼はウィリアム・ロイド・ギャリソンの息子で、20世紀初頭のナイアガラ運動や全米黒人地位向上協会 (NAACP) 設立といった黒人の権利獲得を目指すラディカルな活動にも関与した人物なのだ。そして上に述べたような19世紀の社会改革運動に関連した人々にワシントンが会えたのは、当時自分と親交のあったこのフランシス・ギャリソンが手配をしたからに他ならない⁵⁾。自伝においてワシントンのヨーロッパ渡航は、合衆国での多忙な日常から逃避する、ひとときの息抜きといった調子で書かれている。しかしここで紹介される様々なエピソードや、出会った人々の顔ぶれをじっくり検討すると、実際にはワシントンは、大西洋を越えて広がる人種と性にかかる反差別のネットワークの存在に触れ、そこから合衆国における黒人の現状について目を開かれる経験をした——そんな可能性を垣間見ることができる。

周知のようにポール・ギルロイ (Paul Gilroy) は、その代表著作『ブラック・アトランティック』*The Black Atlantic*において、アフリカ系アメリカ人の作家や知識人たちが、ヨーロッパに渡航する体験を通じ、アメリカ国内での人種差別に対して新たな認識を獲得していく過程をつぶさに検討した。取り上げられた知識人のなかにはあのデュボイスも含まれており、彼には一章分が割かれている⁶⁾。デュボイスのライヴァルであるワシントンについては、その章のなかで申し訳程度に触れられるのみなのだが、実はワシントンについても、ヨーロッパという国外に出ることによってアメリカ国内での人種関係の実態について蒙を啓かれるという、〈ブラック・アトランティック〉的な体験をしたのではないだろうか⁷⁾。そのことが注目されずに埋もれてしまっているのは、この章がごくさりと書かれているためでもあるし、帰国後もワシントンが体制順応的な態度を崩さず、黒人運動の潮目が白人社会との協調から全面対決へと変わっていくにつれて、それまでの支持者たちが次々と彼を見放していくからである。

更に付け加えるならば、ヨーロッパでの体験を終え、アメリカに戻る途上の出来事を書いた場面にも、ワシントンの隠れたラディカルさを発見することができる。以下に引用しよう。

5) 南北戦争前の奴隸解放運動と、世紀転換期の人種をめぐる改革運動との連続性に関しては、James M. McPherson の *The Abolitionist Legacy* を参照。同書の第19章 “Booker T. Washington and the Reaffirmation of Gradualism” には、ワシントンが白人奴隸解放論者の代表格であるギャリソン家の支援を受けてきた経緯や、フランシス・ギャリソンがワシントンの渡航をセッティングした次第が説明されている（特に361-62）。

6) Paul Gilroy, *The Black Atlantic* の第4章 “‘Cheer the Weary Traveller’: W. E. B. Du Bois, Germany, and the Politics of (Dis)placement” を参照 (111-45)。この章でギルロイは、デュボイスの人種問題への関心が、アメリカ国内からアフリカをはじめとする海外へと広がったことに注目し、そのような後年の関心の萌芽が初期の代表著作 *The Souls of Black Folk* にも認められると指摘している。

7) 同様のことは、ワシントンが1911年の秋に行なったヨーロッパ渡航に関するものである。My Larger Education の第10章 “Meeting High and Low in Europe” および第11章 “What I Learned about Education in Denmark” を参照 (136-63)。これらの章でワシントンは、戦後のアメリカ農業の進展がヨーロッパからの移民を促し、同時にヨーロッパに留まる農民の生産力を向上させると指摘する。また、デンマークの教育を視察する記述には、敗戦を契機として発展へと転じたこの国とアメリカ南部を重ね合わせようとする書き手の発想が読み取れる。この著作でのヨーロッパはワシントンにとって、アメリカ南部に生きる黒人の現在と将来を映し出す鏡のような役割を果たしている。海外体験が、アメリカ国内での黒人の置かれた状況を世界の類似の状況と結び付けて考えるようになった、という含みが *My Larger Education* という書名にあると思われる。

After three months in Europe we sailed from Southampton in the steamship St. Louis. On this steamer there was a fine library that had been presented to the ship by the citizens of St. Louis, Mo. In this library I found a life of Frederick Douglass, which I began reading. I became especially interested in Mr. Douglass's description of the way he was treated on shipboard during his first or second visit to England. In this description he told how he was not permitted to enter the cabin, but had to confine himself to the deck of the ship. A few minutes after I had finished reading this description I was waited on by a committee of ladies and gentlemen with the request that I deliver an address at a concert which was to be given the following evening. And yet there are people who are bold enough to say that race feeling in America is not growing less intense! (140-41 下線は引用者による)

この記述によれば、船上でワシントンはダグラスの伝記を見つけ、手に取った。興味深いことにその際の文章は、最初の下線部で示されているように、「私はフレデリック・ダグラスの人生を見出した」と字義通りに解することもでき、この書物の発見が、敬愛する人物の生そのものに触れる体験であったことがさりげなく暗示されている。ともあれその本には、ダグラスがイギリスに向かう途上、船室に入ることを許されず、デッキに留まることを命じられるというエピソードが書かれていたという。それ以上詳しくは説明されないものの、ここでワシントンが言及している差別待遇の挿話は、ダグラスの3番目の自伝『フレデリック・ダグラスの人生と時代』*Life & Times of Frederick Douglass*の第2部・第6章「海外の印象」“Impressions Abroad”に確かに書かれている。当該の章には、船上でダグラスが奴隸制反対のスピーチをしようとすると、周囲の男たちがそれに反発し、暴動が起こりかけた、といった記述もある(678)。そのダグラス自伝の記述を読んだ直後、自分は船上で開かれる予定のコンサートで演説することを丁重に請われた、とワシントンは述べている。事実と取るにはあまりに出来すぎたシチュエーションである。

後年の著作『我が教育の進展』でワシントンは、自分が読んだ最初の本はダグラスの“*My Life & Times*”で、強い感銘を受けて繰り返し読んだ、と述べている(*My Larger Education* 56)。これはおそらくダグラスの3番目の自伝のことを指しているのだろう。『フレデリック・ダグラスの人生と時代』は1881年に出版されたのだが、これはワシントンがタスキギーに黒人学校を開いた時期にあたる。したがって、『奴隸より身を起こして』で語られているこの船上のエピソードは、彼が若い頃から読んでいた愛読書の内容を思い出し、この自伝に盛り込んだ創作である可能性が高い。

さて、ダグラスの本を読んだ直後にスピーチを丁重に請われたその時に、ワシントンが抱いた感慨は、下線で示したようにこう書かれている——「そうであっても人々のなかには、アメリカにおける人種をめぐる感情は昔よりも苛烈さが減じたとはとても言えない、と大胆にも口に

する者もいるのだ！」（“And yet there are people who are bold enough to say that race feeling in America is not growing less intense!”）。この文章を一読すると、ダグラスの時代と自身の時代とのコントラストを、書き手ワシントンは浮き立たせていると受け取れるだろう。しかし、ここまで検討してきたヨーロッパでの体験の様々な記述と併せて読んでみると、必ずしもそうとは言い切れない。アメリカでの人種差別的感情は依然として激しいのだと主張する人々の存在に驚きあきれるどころか、むしろ書き手もあらためて賛同しているのだ、という読みもここでは可能であるように思われる。言い換えると、表向きは人種差別の和らいだ今のアメリカを寿ぐようでありながら、同時にそうした考えを戒める警告を自らに発するような、両義性を孕んだ文章なのだ。そのような解釈をしてみると、このアメリカに戻る船上におけるダグラスの〈本=生〉との出会いのくだりは、人種差別的な合衆国の在り様に対して、ワシントンが追従する態度も反抗する態度も共に認められる「ヨーロッパ」の章、ひいては『奴隸より身を起こして』という著作全体を集約する箇所であると考えることができる。

5. 糖蜜を薄く広げて

ワシントンの自伝『奴隸より身を起こして』には、白人と黒人との間に当時存在したあからさまな上下関係を無条件に肯定するかのような記述が多くある。しかしその一方で、そのような不平等な人種関係を忌避し異議を申し立てようとする要素も、かなりの程度に含まれている。場合によっては、一つのエピソードや文章に、相反するそれら二つの要素が同時に盛り込まれていることすらある。そうしたことが、本稿のこれまでの検討で明らかになった。それでは、この著作で表明されている、黒人よりもまず白人の体面を優先させようとする迎合的な姿勢は、言わば戦略的な偽装に過ぎず、時に垣間見られるラディカルな見解にこそ書き手の本音があると考えて間違いないのだろうか。そうとは必ずしも言えないところに、ワシントンという人物の捉えがたさがある。なるほど、1870年に批准された合衆国憲法修正第15条で約束されたはずの選挙権が剥奪され、南部諸州において惨たらしいリンチが急増するなどの、世紀転換期のアメリカ黒人の窮境をめぐる様々な問題に関して、本音をあからさまに出さず自らの言葉をコントロールしなければならない、という強迫観念がワシントンという人物につきまとっていたことは、ほぼ確実だ。しかし、〈本音〉と〈偽り〉の境目は、当の本人にとっても不分明だったのではないだろうか。この最終節ではその点に探りを入れることを通して、自伝テクストからどのような書き手の人物像が浮かび上がってくるのかを考察してみたい。

第15章「演説で成功する秘訣」“The Secret of Success in Public Speaking”で、貧しかった奴隸制の時代を書き手が回想する以下のくだりは、自分が歩んできた道程へのワシントンの振り返り方を理解するうえで、きわめて示唆に富んでいる。

I rarely take part in one of these long dinners that I do not wish that I could put myself back in the little cabin where I was a slave boy, and again go through the experience there—one that I shall never forget—of getting molasses to eat one a week from the “big house.” Our usual diet on the plantation was corn bread and pork, but on Sunday morning my mother was permitted to bring down a little molasses from the “big house” for her three children, and when it was received how I did wish that every day was Sunday! I would get my tin plate and hold it up for the sweet morsel, but I would always shut my eyes while the molasses was being poured out into the plate, with the hope that when I opened them I would be surprised to see how much I had got. When I opened my eyes I would tip the plate in one direction and another, so as to make the molasses spread all over it, in the full belief that there would be more of it and that it would last longer if spread out in this way. (112)

幼い時分の〈私〉は、贅沢な食事をさせてもらえたかったけれど、週に一度だけ、お皿に糖蜜を入れてもらえるのが何よりの楽しみだった。ただし分量はごくわずか。たくさんの糖蜜を入れてもらっているとあえて想像しながら、目をつぶって受け取った。そして糖蜜をもらったら、お皿をあちらにこちらにと傾けて、薄く広げていく。そうすることで〈私〉は、糖蜜が実際以上にたくさんあると自らに信じさせようとした。大人になって有名人になった今、招待されたパーティーで立派なコース料理が出されるけれど、在りし日のわずかながらの糖蜜の方がずっと楽しみが大きかった。引用部でそんな風にワシントンは述べている。

糖蜜の量はごくわずかなのに、たっぷりあるのだと自分自身に思わせたい心理と、それが自己欺瞞に過ぎないのだという醒めた認識。その二つがここでは共存している。ここで描かれた子供時代の心境は、奴隸制のあった過去に、ひいては奴隸制が表向きは撤廃されながらも黒人がまだ社会的に認知されない現在に、書き手としてのワシントンが向き合う態度へとずらして考えることができそうだ。先にも見たように彼は、奴隸制があった時代をかなりの程度に理想化し、暮らしあは確かに貧しかったけれども、白人たちの被保護者として安逸に暮らすようなところもあった、と述べていた。このような言葉は明らかに、白人オーディエンスの反応を慮って発された言葉であり、その意味でこれはワシントンが対外的に示す〈偽装〉だと言える。しかし同時にそれは、彼自身が信じ込む〈本音〉と化てしまっている感もある。だから私たちがこの自伝を読む際には、例えばチャールズ・W・チエスナット (Charles W. Chesnutt) の小説『杉に隠れた家』*The House Behind the Cedars* (1900年) のように、白人読者を意識した〈偽装〉のテクニックを駆使した同時代のアフリカ系文学者の作品に接する時とはやや異なる、慎重な態度をとる必要がある⁸⁾。

8) 『杉に隠れた家』においては、主流の白人読者が容易に気づかないように、当時はタブーとされてきた人種平等の考え方をメロドラマティックな物語に盛り込もうとする作者の技巧が遺憾なく発揮されている。この点に関しては、里内克

名前の由来という別の角度から、この人物をめぐる〈本音〉と〈偽装〉の問題をより掘り下げて考えてみることもできる。奴隸であったため、ファミリーネームを持たずに南北戦争後の社会に放り出されたブッカー少年は、初めて学校に行った日に、何の気なしにアメリカ合衆国の初代大統領と同一の名前を選び取り、以来ずっとそのファミリーネームで通すことになった⁹⁾。母親がタリアフェロ (Taliaferro) という名前を考えてくれていたことを後年に知り、それをミドルネームにはしたものの、そちらに乗り換えることはしなかった (Up 21)。〈ワシントン〉という名前に体現された、あからさまに主流白人寄りのアイデンティティは、最初は世を渡るためのかりそめの〈仮面〉でしかなかった。にもかかわらず、やがてはその〈仮面〉をはずすにもはずせず、それが〈素顔〉も同然になってしまった——。困難な時代に困難な使命を抱え込み、謙虚な物腰とは裏腹に、ほとんど誰にも心を開かずに生きたとも言われる、この謎めいた人物の最大の悲劇というのは、そんなところにあったのではないかと私は想像する。ワシントンの政治的なスタンスについては首をかしげざるを得ないところが多々あるものの、そんな風にして生きなければならなかった彼の境遇を思うと、その人としての弱さや欠点を批判する気持ちには到底なれないのだ¹⁰⁾。

ブッカー・T・ワシントンは過剰と言ってもいいくらいに白人の立場に配慮し、逆に同胞である黒人に対しては必要以上に点が辛くなるきらいがあった。保守的で迎合的な黒人指導者という、20世紀後半になって定まった評価を簡単に覆すことはできないだろう。しかし本稿では、そのような人物評からはみ出していく要素を、代表著作『奴隸より身を起こして』のなかにあって見出そうとしてきた。白至上主義的な社会の在り方に対して密やかな抵抗を試みる人物としての一面に光を当ててみると、二つの人種の間に横たわる溝を埋めるべく苦悩した、この人物の複雑な、そしてより人間味のある顔が浮かび上がってくる。そのような考えに辿り着くとき、この自伝の冒頭部に潜んだ思いがけない意味を、私たちは読み取ることができる。

I was born a slave on a plantation in Franklin County, Virginia. I am not quite sure of the exact place or exact date of my birth, but at any rate I suspect I must have been born somewhere and

已『多文化アメリカの萌芽』の第11章〈人種〉から〈人類〉へ」(339-70) を参照。

9) Louis R. Harlanは、この学校生活の初日の場面に触れた際、まだ幼いブッカーが「ワシントン」という名前を持ち出すのは、別の名前を自らに与えようと意図したことなのか、継父である Wash (=Washington) Ferguson のファーストネームを使おうと考えたことなのか明瞭ではない、と慎重に述べている (Harlan 36)。しかしながら、ブッカーに厳しくあたったこの継父の名前は、自伝のなかでは伏せられている。そのことも考慮するならば、この場面をブッカーが主流アメリカ国民としてのアイデンティティを身につけようとした象徴的瞬間と捉えるのは、この自伝の当時の読者層にとって、きわめて自然な読み方であったはずである。

10) なお、ワシントンにおける〈偽装〉と〈本音〉(ないしは〈仮面〉と〈素顔〉) という問題を考える際には、アフリカ系の詩人・文学者であった Paul Laurence Dunbar の作品、とりわけ “We Wear the Mask” (1895年の詩集 *Majors and Minors* に収録) への言及がなされるべきであるとの指摘を、本論考の査読者のお一人からいただいた。白人の前では〈仮面〉をかぶらざるを得ず、そのことで本当の自分を見失ってしまうという苦境は、ワシントンに固有の体験ではなく、広く19-20世紀転換期に活躍した黒人作家の主題でもあったし、更には後年のアメリカ黒人の多くが直面したジレンマであったに違いない。そのような指摘をされ、拙論を今後に生かすための貴重な示唆をくださった匿名の先生に、この場を借りて御礼申し上げたい。

at some time. As nearly as I have been able to learn, I was born near a cross-roads post-office called Hale's Ford, and the year was 1858 or 1859. I do not know the month or day. The early impressions I can recall are of the plantation and the slave quarters—the latter being the part of the plantation where the slaves had their cabins. (7 下線は引用者による)

ここでワシントンは、自分は道路の交差するところ（cross-roads）に建っている郵便局の近くで生まれた、と述べているが、これは単なる事実の陳述ではなく、自らの置かれた立場に対する苦い認識を密かに吐露したくだりであるはずだ¹¹⁾。白人と黒人の間で広がるばかりの断絶に何とか橋を架けるべくメッセージを送り続けなければならない——たとえそれが見込みのない試みであったとしても。そんな十字架（cross）を背負って人生を歩んだ彼にとって、これは誠に相応しい出発点であったと言える。

*本論考は、2020年7月6日から7月15日にかけて開催された日本英文学会第92回大会（ウェブカンファレンス）でのシンポジウム「fragileなアメリカ文学」に講師として参加した際の発表原稿を基にしている。また本稿は、科研補助金基盤研究(C)「罪悪感の文学——マーク・トウェイン小説作品の自伝的基盤を探る」(課題番号16K02490)の成果の一部である。

引用・参照文献

- Douglass, Frederick. *Autobiographies*. Edited by Henry Louis Gates Jr., Library of America, 1994.
- Du Bois, W.E.B. *The Souls of Black Folk*. 1903. Edited by Henry Louis Gates Jr. and Terri Hume Oliver, Norton Critical Edition, W.W. Norton, 1999.
- Gilroy, Paul. *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*. Harvard, 1993.
- Harlan, Louis R. *Booker T. Washington: The Making of a Black Leader, 1856–1901*. Oxford UP, 1972.
- McPherson, James M. *The Abolitionist Legacy: From Reconstruction to the NAACP*. Princeton UP, 1975.
- “Review of *Up from Slavery*.” *Up from Slavery*, by Booker T. Washington, edited by William L. Andrews, Norton Critical Edition, W.W. Norton, 1996, pp.160–63. Originally published in *The Nation*, vol. 72, April 4, 1901, pp.281–82.
- Smith, Sidonie. “Casting Down.” *Up from Slavery*, by Booker T. Washington, edited by William L.

11) ワシントンの出生地であるバージニア州ヘイルズフォードは、ア巴拉チア山脈の支脈であるブルーリッジ山脈の麓にある集落である。ルイス・R・ハーランによる伝記に拠るならば、この集落に郵便局があることは確認できるものの(11, 16–17), 彼が生まれた農園との位置関係は不明。ワシントンが書いた自伝にはフィクション的な要素が散りばめられており、それが彼をめぐる伝記的事実を調査する者にとっての妨げになってきた、とハーランは述べるが(15), この冒頭部の記述も書き手の意図的な脚色である可能性が高い。

- Andrews, Norton Critical Edition, W.W. Norton, 1996, pp.219–28. Excerpt from *Where I'm Bound: Patterns of Slavery and Freedom in Black American Autobiography*, Greenwood, 1974, pp.30–44.
- Twain, Mark. *Autobiography of Mark Twain, Volume 1*. Edited by Harriet Elinor Smith et al., U of California P, 2010.
- Verney, Kevern. *The Art of the Possible: Booker T. Washington and Black Leadership in the United States, 1881–1925*. Routledge, 2001.
- Washington, Booker T. *The Autobiographical Writings*. Edited by Louis R. Harlan and John W. Blassingame, The Booker T. Washington Papers, vol. 1., U of Illinois P, 1972.
- . *My Larger Education*. 1911. Dover, 2013.
- . *Up from Slavery*. 1901. Edited by William L. Andrews, Norton Critical Edition, W.W. Norton, 1996.
- 里内克巳『多文化アメリカの萌芽——19~20世紀転換期文学における人種・性・階級』彩流社, 2017年。